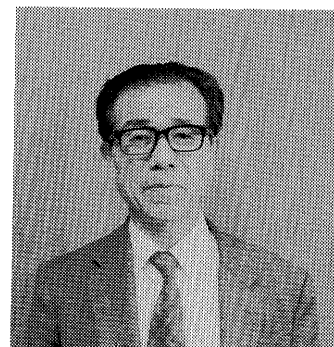


三 枚 舌

千川 純一

日本放射光学会 会長



「二枚舌はきれいなのに、三枚舌とは怪しからん」といわれそうですが、会長就任の挨拶は、三枚舌でさせていただきたいと存じます。

私は、物理学会、応用物理学会、結晶学会、結晶成長学会などに所属していますが、それぞれの学会に気風といったものがあり、性格が異なっているように思われます。放射光学会は、光源加速器と放射光を利用するいろいろな分野の研究者で構成されていますので、これからどんな「学会風」ができてくるのでしょうか。

放射光学会を生んだのは電子加速器です。放射光源という素晴らしいハードに沢山の利用研究が乗り、ソフトがどんどん広がりました。しかし、光源加速器の研究者はソフトを気にかけず、輝度フロントに挑戦してよいのではないのでしょうか。現時点で考えられるようなソフトを気にすると、研究のスケールが小さくなるような気がします。「必要は発明の母」と言われますが、歴史の流れを変えるような大きな発明は将来のニーズ予測から生まれたものではありません。半導体集積回路ICの発明は、集積というよりは配線の省力化を目的としたもので、当時はシリコンのような高価なものを配線に使うのは以ての外というわけで注目されませんでした。高信頼度を必要とする軍用に少し使われただけで、コンピュータへの応用は一番遅かったのですから皮肉です。そうそう、わが放射光も、せっかく加速した電子のエネルギーを奪う邪魔物でしたが、それが放射光科学を生んだのでした。期待通りに行くと期待して研究計画を立てますが、期待通りに行かないところに面白さがあります。研究者は、本来、ごさかしさを捨て自然の摂理に従って自由に生きるものではないのでしょうか。

ともかく、「この世の中はハード先行で進歩。それを利用するソフトや奇想天外な発展はハードが生み出します。究極の光源を目指すことです」こんなことを光源加速器の方に話しながら一方では、放射光利用の研究者に「放射光分野の発展は、それを利用す

るソフトに依存しており、放射光利用のビジョンがないのは将来計画がないのと同じではないでしょうか」という具合に、私はこれまで二枚舌なのでした。

放射光利用研究はいろいろな分野にわたっており、利用者の価値観も発散しています。「生物物理学と放射光」という国際会議が1992年につくばで開催されますが、これからは「〇〇と放射光」という分野の先鋭的高度化が起こることでしょう。自分の分野が最高であり、自分の仕事はベストと信じなければ活動力は湧いてきませんから、このような発展的分化も推進したいものです。どうやら、二枚目の舌の先はいくつかに分岐しているようです。

放射光学会は生きています。生物の細胞は各自独立に生きていますように、その成長のためにはまず何といても個々の研究や各分野の細胞が特色のある発展をすることが基本です。とりわけ光源加速器の分野は本学会の半身で、加速器の研究者にとっても有意義な学会になって欲しいと念じています。本学会はユーザーズ・コミュニティではないはずで、加速器研究者の犠牲において放射光利用が成り立つというのでは、放射光の発展はないと存じます。巨大装置は大きな建設費を必要とするため失敗は許されません。このため安全な設計になりがちで、独創性を生み出す冒険が出来ないという悩みがあります。既存の加速器によるマシン・スタディだけでなく、光源研究用のマシンを作って、加速器の方々に「生きがい」と「遊び」を持っていただける計画があってもよいのではないのでしょうか。西ドイツのDortmund大学にはこのような計画がありません。これは光源加速器の研究者を養成するためにも重要です。

光源加速器の研究も、放射光利用の各分野も、「われこそは」という「有私」の性格が研究に必要ですが、同時に、放射光科学は大きな光源施設を使うのですから、その発展のために各機関、各分野の将来計画には協調が欠かせません。学会は各分野を統括した将来計画を立案していく義務があると存じます。

人間の体には30兆の細胞があってそれぞれ独立に、バラバラに生きていて、しかも全体が一個体として統一がとれ、一つの系ができています。細胞間にはどんな情報が行き交っているのでしょうか、生物学の大きな謎になっているようですが、細胞間の連携が崩れると「死に至る病」になり、絶望です。学会の細胞、研究者や各分野をつなぐ大切なものは「学会風」ではないのでしょうか。人為と自然、作為と無作為、有私と無私、分化と統合を時所位に応じて塩梅して、「渾然一系」の「学会風」が醸し出されるようにと念願しております。あらゆる波長の強烈な光を含んでいて、しかも鋭い一本の指向性を持っている放射光のような学会風をというのが三枚目の舌なのです。